LEON-TODO

Nro 6

1953

MAJO-

ANTAŬPAROLO

またレオントード（たんぽぽ）の季節が来た。そこいらの路傍にも草叢にもいっぱいに咲いている-----

LEONTODO の発刊を思い立ったのは昨年の丁度今頃だった。当時エスペラント講習会もすでに開かれていて、やはり会場は図書館であった。あれからもう一年にもなるのだ。私が Antaŭparolo（巻頭言）として、才1号に題名（誌名）LEONTODO の由来を書いたが、あの時の言葉を今ここにふたたびくりかえしたい。

私はたしかにこう言ったと思う------

たんぽぽが、平凡で平和で、根強く、風雪にも耐えて、年々歳々美しく愛らしい花をつける様に、又、非常に強いその伝播力で憚ることなく仲間をふやしてゆく様に、我達のエスペラント運動も、派手ではないが地味で着実に、長生きするものでありたい。しかも愛されるものとして------

ENHAVO

埋火（北海道エスペラント運動思ひ出話）------- 相沢治雄
Jam Budao Parolis------ Noboru Hayakawa
R.O.の誤訳KONKURSOについての私見 ------- 花園凡太郎
リヒテンシュタイン のことなど 楓生育保
おもいで----(2) ------- アリマ・ヨシハル
Rakonto ; la unu-okula knabaĉo Ŭakisaka-Keiĵi
緑星の由来 (2) ---------- 朝比賀昇
学習者は斯うありたい。 江口音吉
アメリカ航海の日記から---------- 高橋達治
La Fratinoj Malbenitaj de Akvobirdoj ARIMA Yosiharu
La Historio de Japana Kuko ---------- Noboru Hayakawa
児童画 写真 絵ハガキ 郵便切手------ 花園凡太郎
Unua paŝo en amo ------- H. KODAMA
PARDONON ! KAYAMA-Yasuko
発刊一年目の立場 --------- S.Y.

カット, TUKAHARA SEIITI
YAMAMOTO SYOZIRO

埋　火

（北海道エスペラント運動思ひ出話）

相澤治雄

ANTAŬPAROLO

LEONTODO に何か書けと山賀先生や山本君から度々の催促をいただき、何か書かなければ申訳ないと何時も考えながら、さて筆をとろうとすると書きたい事があまりにも多く何から書いたらよいかわからないく せにいざ筆を取ってみると自分の述べたい事、書きたい事の何分の一も表現されていない。つい途中でやめてしまってもう書く気も起らなくなってしまう。要するに私は筆不精の上に筆下手でそのくせ気が多く、自分でもこれならという様なものを書きたいという慾が絶えないのだから始末におえない。しかし何時までもこのまゝですむ事でもなし、又ひるがえって考えてみると北海道エス運動の古い話を知っている人も少なくなり、結果的に本道エス界では老人級となったわけだから、今の内にその当時の色々な事を何かに発表して置かなければ、後世の北海道エス運動史を編さんする歴史家は困惑するに違いないと、途方もなく大きく考え直して何かその様なものを書く事にした。

北海道エス運動史をまとめなければならないという事は今までの全道大会にも度々提案されていた事だし、私自身も常に考え続けていた事なのだが、頼山陽の日本外史や、水戸光圀の大日本史程ではないけれども、やはり仲々大変な仕事で今の私には出来かねるのである。せめてエス運動の色々な思い出や、エスペランチストのエピソードでもまとめておいたらと思い、これから毎号北海道のエス運動に関する何かを書くつもりでいる。時代を追って克明に記述して行くのではなく、昔の手紙やパンフレットを引張り出して思出すまゝに勝手に書いて行くのだから、北海道エス運動を研究する上で重要な文献となる様なものもあるかも知れないし、又、私自身の思い出話に過ぎない様なものも多い事と思う。LEONTODO の貴重な紙面を無駄にしない様に心掛けるつもりでは居るが、時としてはつまらない事を書いてもまうかも知れない。いづれにしても記述する事柄は責任を持って正確を期したいと思う。

第1回全道大會の開催とその前後

1932年（昭和7年）8月5日から3日間第1回北海道エスペラント大会が開催された。開催地は札幌か小樽だらうとだれでも考える事と思うが、実は空知郡の山部村で開かれたのだから、あの当時の事を知らない人は驚くに違いない。何故あの山部村の様な辺鄙な山中で開催されたか？　今にして思うと私自身でも変に思うのだが、まづその当時のエス運動の実状と、大本教の関係を説明しなければならない。

当時北海道のエス運動の中心はやはり札幌であった。いわゆる白樺時代と私達が呼んでいる札幌エス会の最もはなやかな時代であった。札幌エス会の外に北大エス会が盛んな活動をして

いたし、鉄道のエス会も力強い存在であつた。帯広エス会は三田智大先生の指導の下につい最近物故された（3月12日 R.O 1953 N-ro 5参照）原田三嶌君が中心となつて居たし、函館には小田島栄君や吉田栄君、その他の有力なメンバーがそろつていた。苫小牧では渡部隆志先生、小樽では近藤義藏氏 bona esperantisto ではない様に思つたが、熱心な subtenanto であつた小樽高商のスミルニツキー氏、その他釧路、根室、室蘭等の各地にそれぞれエス会があつたのだから現在とは比較にならない位全道のエス運動は盛んであつたし、地方の組織は一応まとまつていたのである。

左翼的なエス団体は全国的なものとして、P.E.U（Proletaria Esperanto Unio）があつたのだが、北海道でははつきりとした形のものは表面には現れていなかつた。思想的な傾向のエス会として、希望社のエス会があり札幌では上田源松といふ人が中心となり、毎週集会をしていた。それから宗教的な団体としてのエスペラント普及会北海道本部（Hokkai-Centro de Esperanto-propaganda Asocio）があり、之が非常に強力な団体であつて、このエス普及会の事を説明すれば何故第一回大会が山部で開かれたか了解がつくのである。

昭和9年12月25日印刷のエス普及会の略歴を書いたパンフレットから創立の由来といふ処を抜抄する方が一番よくわかると思う。

昭和3年8月，北海道の中心地、山部（ねむろ本線・山部駅前・石狩国・空知郡・山部市街地）に京都府綾部町に總本部を同亀岡町に本部を置く皇道大本の北海別院が設置された。

皇道大本總統出口王仁三郎氏は早くからエス語を採用され、大正12年にはエスペラント普及会（E.P.A）を設立、全国的に普及運動に尽力されて居たから、当時から北海道に於ても信徒間に多少の研究熱が起り、雑誌を講読したり独習書を繙く人達があつた。

然るに昭和4年2月、当時北大エス会幹事たりし中村久雄氏が同別院奉仕となりてよりは普及運動は次第に具体化するに至つた。

同別院には絶えず全道各地より修行者が参集することとて、時々希望者に対しては道室講座が開かれた。そして同年7月12日には愈々本部の承認の下に同別院内にエスペラント普及会北海本部が設置された。役員としては代表者に田中省三氏（当時皇道大本北海道特派宣伝使）、幹事に中村氏他数氏が任命された。（以上原文通り相沢）

そして帯広、旭川、下富良野、黒松内、釧路、根室、稚内、岩内、札幌、函館、室蘭、名寄で昭和9年10月までに中村久雄、上野隆司、増田亮平の三氏が18回の講習会を開催し、受講者数計434名に及び、E.P.Aたかす支部（旭川たかす）、旭川支部、黒松内支部、釧路エス会、根室エス会、E.P.A稚内支部、室蘭エス会を創立した。その外エスペラントに関する講演を根室、岩内、苫小牧、壽都で開催した。

とも角大本教の別働隊であるE.P.Aの活動といふものは実に目ざましいものであり国際的にパリに国際本部を置き、雑誌 Oomoto、新聞 Internacia Oomoto を発行していた位だから他の如何なるエス団体よりも活潑であつたのは事実である。しかし中村久雄氏の態度及びE.P.Aの方針は、宗教的な立場に立つてはいたが、純粋な気持でエスペラントの宣伝をしていたと信ずる。だから熱心なクリスチヤンである渡部隆志先生や、常に中正な立場を取つて居られる三田智大先生もE.P.Aの提唱した北海道エス大会の開催に賛成されたのであろう。

昭和7年3月EPA北海本部は全道のすべてのエス会並びに著名なエスペランチストに対して全道大会の開催を提案した書面を発送した。その内容を要約すれば次の様なものであつた。

----今日国の内外を挙げてのあらゆる事情の

進歩に比し、此の運動はその学習研究の上に於て、又組織の上に於て余りに微弱である事は遺憾に堪えない。九州、台湾、北陸、樺太の諸地方に於て聯盟の組織や運動が著しいのに北海道はまだそこまで進んで居ないのは御同様遺憾に堪えない。当会では年来全道大会の開催を主張し之に就ては既に機関誌ラ・ノルダ・ブリーロ1号にも発表した処である。当大本北海別院は庭園の設備、各種建築物の造営等続々と工本を興し、宿舎、大集会所、園遊会場其の他の設備が整い、全道大会を開催する事が出来る旅になった。元来エス大会は全道のエスペランチストが支持すべきものであるから、先づ全道エス聯盟を結成し、各地エス会から選出した委員で大会準備委員会を組織してその協議によるべきであるが今回は初回のことであり又現状に於ては、委員会の組織やその協議は困難であると思われる。従って今回は僭越ながら当会が発起主催する事に御賛同御一任願いたい。そして聯盟の結成は大会に於て協議されたいと述べ、更に山部は本道の中心であるという事を述べて、

当本部庭園「萬祥苑」は面積約2000坪、宿舎「登龍舎」は二階建、建坪200坪、集会所「更生殿」は90坪、その他鳳明殿、風雲荘、事務所等あり、この山部の自然の美を一眸に集めた好位置を転してあます。仰げば芦別の秀峰、俯すれば空知の清流、めぐらす翠巒、実に北海道屈指の風光に恵まれたる山郷であります

と述べ、大会開催に就ての御賛成御協力をねがう次第であります、と結んでいる。この趣意書はE・P・A北海本部長田中省三、幹事主任中村久雄二氏の名前で発送された。

その後中村氏は各地を歴訪して大会開催の趣旨の説明やら打合せやら勧誘やらをされた様子である。

3月24日苫小牧エスペラント会渡部隆志先生が山部を来訪され大体の大会行事の打合せが出来、次の様なプログラーモが発表された。

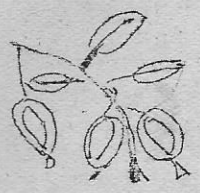
◇昭和7年8月5日（金）
大会発会式、協議会、大会のタベ（親睦晩餐会、余興）

◇　8月6日（土）
講演（午前）、辯論大会（午后）
才二回協議会、大会のタベ（座談会）

◇　8月7日（日）
講演、園遊会

その後、7月8日にインフォルミーロ才2号が、7月31日に才3号が発行され、京都の本部からハンガリー人ヨセフ・マヨル氏、（パリ・ソルボンヌ大学出身、当時29才）井上照月氏、バハイ教のアグネス・アレキサンダー女史もこの大会に参加される事が発表された。

（つづく）



才17回北海道エスペラント大会　近し……

本年度（1953）の大会は小樽と決定しました。
日、時、ところ、日程その他は次号に詳細を報告出来ると思います。
全北海道のエスペランティストの参加をのぞみます…

Jam Budao Parolis

—Pri la homa maljuniĝo, malsaniĝo kaj mortiĝo—

trad. el "Sankta Skribo de Budaismo,,
kompilita de S-ro Tomomacu-Entai

de Noboru Hayakawa

Kiam mi ankoraŭ estis doktrinserĉanto nekompreneme, mi havis neniun sufera al mi. En mia patra domo, jen estis tri banakvujoj, en kiuj floris lotusoj: en la unua la bluaj, en la dua la ruĝaj, kaj en la lasta la blankaj. Mi estis bonodorigata nur de blankosantala incenso produktita en Kaŝi Lando. Kaj, mia vesto, subvesto, kaj intervesto estis ankaŭ enlandaj produktaĵoj de la sama lando. Por mi, blanka ombrelo estis levata super la frunton tage kaj nokte, por eviti mian tuŝon al polvoj, hervoj, rosoj, kaj ankaŭ denove malvarmon kaj varmegon. Mi tiam havis tri domojn kiuj taŭgis al mi: la unua por mia vintro, la dua por mia somero, kaj la lasta por mia printempo. Dum kvar varmegaj monatoj, mi restis en la domo por mia somero, kaj estis tiel konsolata de muziko ke mi ne intencis eliri suben. En mia patra domo, rizo kaj viando estis tiel donata al miaj servistoj, dungitoj, kaj parazitoj, kiel la manĝaĵoj enhavanta saletan kaĉon al tiuj en la domoj de multaj.

Kvankam mi estis tiel riĉa kaj sensufera, subite al mi okazis kordolaroj. Mi tiam meditis kiel jene:

'Poporo havas la sorton nature maljuniĝi, kaj ankoraŭ ne estas liberigita de tia sorto. Tamen, malgraŭ tio, ili suferas antaŭ la maljuniĝo de la aliaj. Kaj, mi ankaŭ, bedaŭrinde. Ĝi ne estas konforma al mi.'

Mia fiereco el sia juneco estis forlasita tiam, kiam mi tiel konfirmis.

'Ĉiuj estas nature malsaniĝontaj, kaj ankoraŭ ne estas liberigitaj de tia sorto. Sed malgraŭ tio, ili suferas pri la malsano de la aliaj. Kaj, mi ankoraŭ, bedaŭrinde. Ĝi ne estas konforma al mi.'

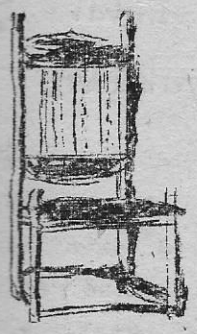
Mia fiereco el sia senmalsaneco estis forlasita tiam, kiam

mi tiel konvinkiĝis.

Denove mi meditis: 'Popolo estas nature mortonta, kaj ankoraŭ ne estas liberigita de tia sorto. Sed malgraŭ tio, ili suferas antaŭ la morto de la aliaj. Mi estas ankaŭ mortonta, kaj ankoraŭ ne estas liberigita de tia sorto. Sed malgraŭ tio, mi suferas pri la morto de la aliaj. Kial? ĝi certe ne estas konforma al mi.'

Tuj kiam mi enpensiĝis tiel, mi estis liberigata de sia vivfieneco.

(fino)



R.O.の飜訳KONKURSOについての私見

花園凡太郎

R.O.の五月号に「飜訳KONKURSO」の応募規定と諸家からR.O.のenquête(アンケート)に寄せられた回答とを読んでみて感じたことをすこしばかり書いてみよう。

私はかねがね、わが国のEsperantistoj が、どうして自国の現代作家の名作をエス訳して、海外に紹介しないのか、と内心不満と不審に堪えなかった。戦后に「きけわだつみのこえ」や「原爆の子」はエス訳されて出版されたけれども、日本の文学的作品は、ある作家の作品のいくつかがエス訳されて、海外の雑誌に発表されたこと以外には何も聞き知らぬので今回の飜訳KONKURSOの企てをきくことはいっそうれしい。

今回の「飜訳KONKURSO」について感じたことは、才一にteksto の選定についてである。どうしてtraduko を散文(小説、戯曲、童話)の短篇(原文で2万字位)だけに限定したのだろう。長篇のある章(原文で2万字以内)を採ることも考えられてよかったのではなかろうか。回答の中には、短篇が案外少いように思はれた。

才二には、各家のenquête に寄せられた回答の中に案外戯曲と童話が少いことが(来月号の回答を見ないから断言はできないが)目につく。ことに上演されて好評を博した「戯曲」がほとんど挙げられていないのは惜しい。

才三には、しめ切りをどうして8月末日とせずに7月末日としたのか。8月末日をしめ切りとしたら、夏休みを利用して応募する人も多くなる訳にならないものだろうか。

私の考えから言うならば、日本現代文学の散文のエス訳紹介はたしかに有効にちがいないが、「基地の子」や河上肇の「自叙伝」などもエス訳して、ひろく世界のSamideanoj に了解させることの方がいっそう有効適切ではないだろうか。

たとえば五月五日の朝日新聞に作家高杉一郎氏が「異国の読者に訴えたもの」と題して書かれた一文にあるように、未知の南独のドイツ人——昭和12年に日独交換学生として国史を専攻した人——のように戦后の日本文学の代表作として送ってほしいといってきたのに対して、高杉氏が加藤周一の「ある晴れた日に」、野間宏の「暗い絵」竹山道雄の「失われた青春」、宮本百合子

の「播州平野」に河上肇の「自叙伝」をえらび出して送ったところ、彼からさきごろ届いた才三信には河上肇の「自叙伝」から最も深い感銘を受けたと書いてあったそうだ。

高杉氏はそれについてこう書いている――私の送った本は、小さな本だなからほとんどなんの考慮もなく、手あたりばったりにえらびだしたものであるし、それをひとりの外国人がどう読もうと問題にすることはないかもしれないが、出版当時はそれぞれ評判になったときいている。（そのころ私は留守だった）小説よりも河上さんの自叙伝の方が異国の読者につよく訴えたという事実は、やはり興味がある。

私は、R.O.からの enpuête が「外国へ紹介するに適当な文学作品」と銘打っているだけに、いかなる日本文学の作品が外国人の心に深い感銘を与えるかを充分に考慮した上での回答が欲しかったので、このことを書きしるして注意を喚起したいのだ。

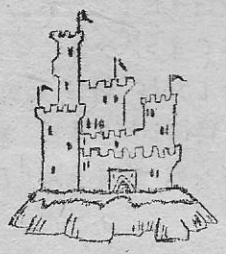
ついでにもう一つ蛇足をつけ加えようてみよう。

それは作家の姓名の書き方についてである。従来、英語学者などの書き表はし方は、あちら式であったが、今回は断然日本式に書かれてほしい。たとえば夏目漱石ならば Nacume Soseki として Soseki Nacume とは書かないことだ。英文学者の中には国木田独歩を Doppo Kunikita として平気でいる御仁もある。この先生などは英語の大家かは知らぬが日本語の senco は nulo であると申さなくてはなるまい。国木田独歩は Kunikida Doppo であって、断じて Kunikita Doppo ではないのだから------→

戦后の新進作家は、概して文章が下手になったようだ。牛のよだれのようにだらだらと長いのや、サッカリンみたいにへんにせったるいのや、無闇にゴッゴッした生半可な難語をならべたてるのが多いようだから、それらをエス訳するのにはかえって骨が折れることだろう。

私は、生き生きとした立派な Esperantaj tradukoj が R.O. の編輯部に山のように寄せられることを心から念願する余り、こんなぶしつけなことを書き記した。妄言多罪。

（10. 5. 1953）



リヒテンシュタインのことなど

桐生育保

リヒテンシュタインなどという国があることを御存知の方は少いと思ひますが それでも Antaŭmilita esperantisto の中には 恐らく 知っている人もあるのでは ないでせうか。昭和何年頃だったらうか？ 多分13年頃だったと思うのですが、ESPERANTO 誌上で〝リヒテンシュタインでエスペラント文の案内書を発行したから 希望のものは 直接申込め〟と言ふやうな記事をみたので 早速申込んでみました。その時 案内書と言ふ言葉が わからなくて 随分苦労したのを 今でも覚へています。わからなかった位だから まだ S-ro K. OSSAKA の和エス辞書を持っていなかったのだと思ひますが S-ro Ŝ ISIGURO の〝エスペラントの文通〟などの中を 繰返し探したものです。

しばらくすると その案内書が送られて来ましたが なんと云ふ版かしりませんが 八ッ折り位に 畳んだ パンフレットやうのもので ひろげると 一面に5cm角くらひの写真版が ならんでいて リヒテンシュタインの風物が展開され 各写真の下に小さな文字で 英 独 (だと思ふのですが) 語などの終りに esperanto の frazo が続いていました。 山の中腹の城を背景に リヒテンシュタイン の belulinoj が 2〜3人並んでいるものなど 今でもなつかしく思ひ出されます。

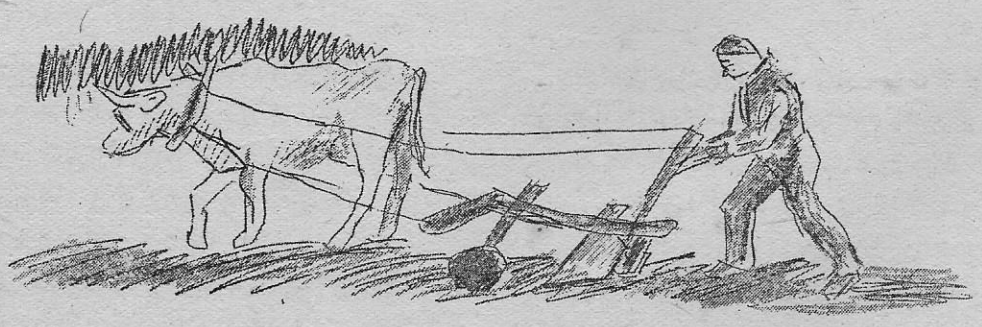
丁度この時分 Brazilo の fraŭlino とも 文通していたので 友達の間を propagandi して廻って "世界と文通するには 是非 ESPERANTO で" などと、このパンフレットなども 見せて歩いたものですが どうも 不熱心な奴等ばかりで —— Verŝajne ankaŭ mi mem —— とうとう カクトク出来ませんでした。

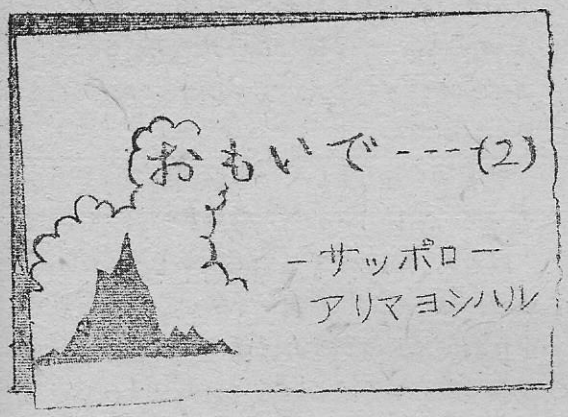
そのパンフレットの中には skia sezono は何月頃がよい とか 旅館の設備や宿泊料なども書いてあり "Alvenu!" と inviti につとめていました。 eŭropo の 多分アルプスの山の中の国だったと 記憶しているのですが 今度の Mondmilito でどうなったやら。 Militbatalo の影響など受けなければと 祈っているのですが。

La milito と云へば 自分の方が 変りすぎる位 変ってすひました。 昭和14年に軍属として渡満して 丁度16年の関特演の最中に移動したものですから 持ってた書籍を kunporti 出来ず 全部失ってすひました。 その中には esperanto の本も大分あったのですが 今でも残念に思ひます。"Epoko" などの叢書類や senditaj leteroj や 満鉄 リヒテンシュタイン や等々の案内書など 秘蔵のものも多かったのですが。

終戦から2年間 シベリヤ生活。 Ruso でも "熱" のことをテンペラトール (temperaturo) 浴場を バーニヤ (banejo) などと 当然のことながら esperant-similaj vortoj が 多かったので rusaj を覚へるのに 大変楽をしました。 Ruso にも esperantistoj が いる筈と思ひ soldato は 別として 宣伝部の将校や 軍属 inteligenta らしい地方人などに alparoli してみたのですが この方は無駄でした。 尤も militkaptito と接触出来る人の範囲などしれたものだったでせうが。

蔵書を失くしてからは も一度やりたいと思ひながら ŝanco もないまゝ 今年になって s-ano アリマ を知るまでは esperanto との関係も絶へたまゝでしたが 再び Esp を始めるについて alilanduloj と文通したり novaj amikoj を獲得したりなど 種々 deziro を持っているのですが その中でも 戦後のリヒテンシュタインの 様子を知りたいと思っています。





3. ESPERANTOでもうかった話

これはJEIのS-to 三宅史平が1941年満鉄から招かれて,満州へ向う船中で一人の客から聞いたという話として大連エスペラント会主催の歓迎会の席上で語られた話------

S-to 三宅がデッキで海の景色をながめていると一人の中年紳士が胸のVERDA STELOをながめて話かけてきた。 エスペラントの近況などについてうけこたえしているうちに、その紳士が宇式伝吉という人であることもわかった。

彼は30才の頃、ちょうど1918~9年頃に松ヤニの買いつけをするためVladivostokoにわたった。 ロシヤのツアー政府との間に国有の松ヤニの買付契約をして、24万円を前わたしした。 ところがそれを受取った政府の役人はそのmonoを着服してSanhajoへにげてしまった。

赤軍はこの契約をみとめない。そこで宇式氏は直接交渉をする決心をして、いやがる通訳をつれ赤軍司令部へ出向き、司令官に面会をもとめた。 宇式氏がヘヤに入ってゆくと司令官が彼の胸のVERDA STELOをみつけて飛びついてきた。

Ĉu vi estas Esperantisto?
Jes, komandanto!

—このESPERANTOのおかげで交渉はとんとんびょうしにうまくいった。 司令官は松ヤニの積み出しを黙認してくれた。 宇式氏はおもわない幸運を得て、汽船3セキに松ヤニを満載して、司令官の好意とESPERANTOに感謝しつつ帰国の途についた。

当時はちょうどアメリカでメト中のため輸入がトゼツしていたときだったのでウラジオから持ちかえった松ヤニは40万円に売れたが、これ全くESPERANTOと胸につけていたVERDA STELOのおかげだった。 もしそうでなかったら命さえあぶなかったかも知れない。と宇式氏は当時を思い出しているようなおもむきで話をおえたのだった。

4. ニッポン語の意味がESPERANTOでわかった話

これはいま松蔭エスペラント会で活躍しておられるS-to 大野昌一から大連時代に直々聞いた話------

昭和3年に開かれた大阪のESPERANTISTA KONGRESOに出席したS-to大野は京都の祭友会館でのPOSTKONGRESOで青森方面から参加された横林のS-to渋谷悠蔵ととなり合せになったが、会の途中でひとあし先きに帰えろうとするとS-to渋谷があわてて何か頼みのコトバを投げかけてきた。

頼みを何辺聞い返してみても、S-to渋谷のズーズー弁では何をいってるのかさっぱり受けとれない。そこで当惑したS-to大野は思いきってESPERANTOで大体次のように聞い返してみた。

"Bedaŭrinde mi ne povas kompreni vin. Bonvole ripetu ankoraŭ foje. Kial ne? Mi nun parolas kun vi japane. Sed mi tute ne povas kompreni vin. Mi deziras, ke vi ripetu en Esperanto."

秋田雨雀

これに対してs-ro 淡谷もESPERANTOで返事をしてくれて、彼のたのみが「おかえりの途中郵便局で電報をうってほしい」という意味であることがはっきりした。ESPERANTOがなければわれわれ2人の間の話はラチがあかなかったかも知れない。s-ro 淡谷はそのとき、自分は方言を使っているのではない、ただ発音がわるいのだ。東北人は寒さのためか、口を十分に動かさないクセがついてしまっているからコトバの発音がはっきりせずわかりにくいのだと弁解に似たことを言っておられた。

5. ESPERANTISTOはお人よしだと思われる話

私がまだ大連で満鉄本社につとめていた昭和8年の夏のある朝のことだった。出勤すると待ちかまえていた同僚たちが、「アリマ君ESPERANTOの同志がきているヨ」と知らせてくれた。さっそく会ってみると、28～9の青年で身には古びた所々に破れ穴のあるシナ服をまとい、上級コジキとまがう姿をしている全然しらない人だ。誰から僕のことを聞いたのだろう？何の用事で来たのか知らと考えていると、先方は笑顔で、

"Bonan Matenon! Mi estas Esperantisto, Ĉu vi estas s-ro ARIMA?"

と立てつづけにESPERANTOでペラペラッとまくしたてられた。

当時は何もしゃべれなかった私はすっかり面くらってしまって、これはすばらしいsamideanoがたずねてくれたと思い大いにカンゲキし、さっそく大連エス会の会員に電話で連絡した。その日のうちに出発するというので昼食に集まれる者だけ集まって、洋食でささやかながら歓送会を、初めての彼のために催したのだった。彼の破れた服をみて気の毒がり、自分の服をわけてやる約束をしている同志もいたが、大連エス会のsamideanoには親切な心の持主が多かったのか、それともお人よしが少なくなかったのかも知れない。

彼を港で送り出してから数時間後にひとりのsamideanoから電話がかかってきた。「同志を訪ね歩いてEsperantistoといっわり、食わせて貰って歩いてる男が近日中に行くと思うがその男はEsperantoを食い物にしている奴でsamideanoでも何でもないから注意せよ」といった意味の電話だった。しかしその時はすでにその男に利用されてしまったあとだった。

Esperantistoには私だけでなく全般的にお人よしが多いようだ。相手がsamideanoとして訪ねてくれば、初対面から年来の親友に接した心になって大したウタガイも抱かず喜びむかえる風がある。旅行途中や出張先で前ぶれなくEsperantistoを訪ねても喜んでむかえてもらえるし、こちらもエンリョなく初めての家でごちそうになることが多く、このことをお互不思議に思わず楽しい時間を送って別れることはEsperantistoならよく知っていると思う。

こんな気持やatomosferoは英語やドイツ語その他ESPERANTO以外のコトバを学んでいる人達には思いもよらないことにちがいない。こんな人類人愛といった感じを抱きあえるのはお互がニッポン人同志だからではない。相手が欧米人だろうが黒人だろうがEsperantistoであれば皆同じ気持を抱ける者だ。

私がハルビンにいたころ、ロシア人は昼食時間が来ても、あまり知らない他人には食事を出さない国民だと聞いていたが、ハルビンで有名なmalnova samideanoのs-ro P. Pavlovを初めて訪ねた日、彼は大変よろこんで自分の美しい姪や年老ったedzinoを交えてちょうど同道していたs-ro KIOも一緒に昼食をごちそうになった

が、こんなことは破格なことだと s-ro KIO は説明してくれた。これも私が ESPERANTO を学んでいたからだと思う。

できるだけ全世界に広く ESPERANTO がひろまって平和を希望する人が多くなることの助けとなるならば私はよろこんでお人よしになってもいいとおもう。

編者註, s-ro Mijake diras----
「わたくしが満州へ行ったのは 1941年のこと。 6月15日 大連上陸。 6月28日 奉天発 朝鮮をとおって帰りました。
--------」

Fabelo

RAKONTO: la unu-okula knabaĉo

Ŭakisaka-Keiĵi

Tio okazis en mia malgranda tempo; kiam mi plorus en ia kaŭzo, mia patrino kutime parolis al mi jenan rakonton, kaj ŝi atendis min ĉesi en ia plorado;

"Ĉu bone, knabo, ke vi ploras tiel longe. Se vi ne ĉesas ankoraŭ vin, baldaŭ alvenus al vi la unu okula knabaĉo, kaj li akompanus vin al la monto."

La patrino diris tiel enrigardante mian vizaĝon.

"Vi mensogas min, patrino! Tiun knabaĉon oni ne vidas."

Mi diris tiel pensante ke la patrino certe mensogas.

"Ne, mi ne mensogas. La unu okula knabaĉo vere vidas. Jen li havas malgrandan korpon. La okulo estas nur unu kaj sur la vizaĝo oni ne vidas la nazon, sed ĉiam eltiras ruĝan langon ekstere el sia buŝo kaj la knabaĉo alvenas de tempo al tempo al mia vilaĝo kaj serĉas tie knabon ploranta. Se li trovus plorulon, li tuj forrabas. Ho, estas terure, ĉu ne!"

La patrino, tiel dirinte, ĉiam minacis min. Tiam mi nur eniris en lernejon ke mi estis ok jaroj ankoraŭ malgranda, kaj kiam mi aŭdis tiun parolon de mia patrino, mi ĉiam havis tiel teruron ke la unu okula knabaĉo, kiu havas grandan okulon, sed ne havas nazon, nun alvenus al mi tra la fendo de l'pordo, eltirinte la ruĝan langon ekstere el sia buŝo kaj sukante siajn manojn.

Nun hodiaŭ, kiam mi ekmemoras en tempoj tiun rakonton,

mi ankoraŭ nun havas teruron al ĝi malgraŭ mi jam estas plenkreskulo. Sekve estis fakto, tio ke kiam mi estis malgranda de ok jaroj, tiu teruro estis plia.

Nu, la rakonto de l' unu okula knabaĉo terura, pri kiu mia patrino ĉiam parolis al mi, estis jene ;

* * *

Antaŭ longa tempo, en tiu ĉi vilaĝo oni ne havis domon tiel multe kiel nuna. Kaj ankaŭ la domo, en kiu miaj gepatroj nun loĝas, ja estis konstruita de mia onklo. Kiam la onklo vivis, la ĉirkaŭo de lia domo estis plie kvieta kaj staris multe malnovaj arboj, el kiuj oni troviĝas grandajn kriptmeriojn kaj acerojn ĉirkaŭitaj la domojn. Kaj sur la monto, kiun oni troviĝas malantaŭe de la domo, staris dense arboj, pro kiuj la monto estis mallumigita tage.

Sur la monto, loĝis deversaj bestoj : precipe, kaj vulpo, krome terura lupo, kiu alvenis de tempo al tempo en tiun ĉi vilaĝon kaj atencis homon aŭ detruis grenon aŭ forrabis kokon. Tial vilaĝanoj kunvivis singardeme kaj helpeme unu la alian.

Nu, en tiu ĉi vilaĝo loĝis la plej supra majstro de pafilo, kiu estis nomata S-ro TONBEJ, kaj li ĉiam kutime eniris al la monto trovita malantaŭe de mia domo. kaj vivis kaptinte birdojn aŭ bestojn.

Iun tagon, kiel kutime, li eniris al la monto portante pafilon sur sia ŝultro. Li kaptaĵon serĉis kaj serĉis, sed kiel faris hodiaŭ. li ankoraŭ nun ne troviĝas eĉ unu kaptaĵon. Tempo pasis, jam estis tagmeze. Malgraŭ tio, li ne kaptas eĉ unu leporon. Kredeble ĉiuj vivaĵoj teruris la pafilon de S-ro TONBEJ, oni pensis tiel.

Antaŭ ĉio, S-ro TONBEJ iom laciĝis pro sia pasado kaj ankaŭ sentis apetiton. Tial li sidiĝis sur la herbaro troviĝita proksime al la rivero, al kie li nun alvenis. Kaj li ekmanĝis alportantan manĝaĵon ĉe la talio. La ĉirkaŭo estis kvieta. Nur vento blovis kaj ĝi sonorigis foliojn kaj herbojn. Finmanĝinte la manĝaĵon la S-ro TONBEJ ekfumis eltirinte la fumpipon de sia talio —, post iom da tempo li ekturnis sian vizaĝon dekstren. Tiam liaj okuloj momente kaptis iun beston. Tie estis unu vulpo, kiu estis kaŭrita sur ŝtonetaro proksima al ok-naŭ metroj

Li ekhaltis s
"Tiu estas
Kaj li repre
al la vulpo. Je
ĝetis apud de
ke oni ne kalp
Tie kaŭrit
sin al sia vu
S-ro TONBEJ
movo. Tiam a
tempo ; kiam
sur la brakoj
sis, ke, certe,
neniam ŝanĝ
sis sian rigar
ite la vulpino
la riverbordo
pinto de la p
ankaŭ ekpied
sian infanon
de l' vulpeto k

原稿

Ni atenda
tereaan ver
eta gazeto L
7, kiun ni e
Julio.

: Ĝis la 1

Se Japana
Bovole str
peron, noma

Se Esperam
Ne embar
malbona f

ENHAVO ...
LONGECO ...

Li ekhaltis sian spiron, sed li tuj diris en sia buŝo.

"Tiu estas al mi favorata".

Kaj li reprenis la pafilon, sed kiam li fiksis bone sian rigardon al la vulpo. Jen li ankaŭ vidis unu malgrandan beston, kiu moviĝetis apud de la vulpo; tiu besto ankoraŭ estis tiel malgranda ke oni ne kalkulas multe liajn taĝojn. Ja estis la vulpeto!

Tie kaŭrite la patrina vulpo nun estis mamnutrita kaj lasis sin al sia vulpeto iom malfermite siajn okulojn.

S-ro TONBEJ dum iom da tempo fiksis sian rigardon al ilia movo. Tiam alvenis lin senkaŭze la memoro en sia malgranda tempo; kiam li estis tiel malgranda, li estis ĉirkaŭprenita sur la brakoj de sia patrino kaj estis mamosuĉigita —— Li pensis, ke, certe, ĉiuj patrinoj: eĉ se ili estas homo aŭ besto, ili neniam ŝanĝas sian amon al sia infano ——. S-ro TONBEJ fiksis sian rigardon al ili je tiel koro, kiel li sonĝas ion. Tiam subite la vulpino eklevis sin kiel ŝi ion ekmemoris kaj ekiris al la riverbordo. La vulpeto, kiu subite estis forlasita de la mamopinto de la patrino, rigardis kun surprizo la patrinon, sed li ankaŭ ekpiedis malantaŭe de la patrino. La vulpino rimarkis sian infanon. Ŝi returnis sin malantaŭen kaj rodis la koron de l' vulpeto kaj akompanis al la antaŭa loko. Oni pensis, tiel ke, tiam la patrino alparolis al li, sed tuj forlasis poste la vulpeton kaj proksimiĝis al la riverbordo. Sur la rivero surakviĝis unu granda verkita arbo. Kiam la vulpino alvenis tie, ŝi iom tempe surpiedis siajn piedojn sur la arbo, sed eble ŝi pensis ke ĝi estas taŭgata por sia transiro. Ŝi rekte suriris sur la arbo kaj fine ŝi transiris al la antaŭa bordo. Kiam ŝi venis tien, ŝi reeturnis sin al la forlasinta vulpeto, sed kiam ŝi vidis la sian filon kaŭrita sur la ŝtonetaro, ŝi piediris en la arbaron kun tute trankviliĝeco.

Jam de antaŭa tempo, S-ro TONBEJ rigardis fikse tiel ilian

原稿募集

Ni atendas vian interesan verkon por nia eta gazeto LEONTODO N-ro 7, kiun ni eldonos en Julio.

: Ĝis la 10a de Julio

Se Japana .....
Bovole skribu sur la paperon, nomata GENKŌJŌŜI.

Se Esperanta .....
Ne embarasu nin pro malbona formo de literoj.

ENHAVO ..... laŭvola
LONGECO ..... laŭvola

movon. Kaj kiam la vulpino foriris en la arbaron, li momente ekkonis sin mem. Li staris de sur la herbaro kaj ĉi foje, li transdonis siajn okulojn tie sur la forlasintan vulpeton. La vulpeto kaŭris senmove sur la ŝtonetaro. La vizaĝo de l' vulpeto sur kiu forĵetas malforta lumo, Ho, ve kia estas amema. Kiam s-ro TONBEJ rigardis tiun ameman vizaĝon, li momente ekmemoris pri sia filo, kiu estas nur unu por li kaj li nun havis tiel penson ke li alportu al sia filo la vulpeton. Do li ekpiedis de sia loko kaj alvenis malrapide al la vulpeto. S-ro TONBEJ nun staris antaŭ la vulpeto. La vulpeto movis supren sian vizaĝon, kaj li sentis iun maltrankvilecon, ĉar li vidis tie misteran homon kaj la pafilon brilanta per la lumo. Subite la vulpeto eksploris. Kiam s-ro TONBEJ aŭdis la plorvoĉon de l' vulpeto, li tre rapide ekkuris al la riverbordo trovita kontraŭe la vulpeto, kaj la verkintan arbon, kiu surakviĝis sur la rivero, li puŝis per la pinto de l' pafilo. La arbo pro sin liberigita forfruis malrapide malsupren sur la rivero. S-ro TONBEJ certiĝis la fruadon de la arbo kaj li trankviliĝis. Kaj li ree alvenis al la vulpeto. Kiam la vulpeto vidis la s-ron kaj la pafilon, li denove eksploris. Tiu plorvoĉo sonis transe en kvietan arbaron.

"Hum, eĉ se vi ploros tiel, estas vana! Ĉar via patrino ree ne transvenas al ĉi tie."

Tiel dirinte s-ro TONBEJ prenis sur siaj brakoj tiun kompatindan vulpeton. La vulpeto movis forte sur liaj brakoj, sed kiel li povas fari?

"Hej, ne movu tiel, se ni revenis hejmen, mi nutros vin per bongusto —. Hej, trankviliĝu!"

Tiel dirinte s-ro TONBEJ volis foriri, sed kiam li momente forĵetis sian rigardon al la riverbordo antaŭa, jen li tie vidis la vulpinon, kiu kun akra rigardo al li staris ĉe la bordo. La okuloj lumis por indigno, kaj ŝi rigardis fikse lin kun elmontritaj dentoj el buŝo. s-ro TONBEJ momente estis ektimigita, sed li volis foriri, ĉar li pensis tiel ke la vulpino ne povas transveni sur la rivero. Jen, tiam la vulpino ree eksploris kun mistera voĉo kaj la okuloj, kiuj lumiĝis pro la kolero, subite ŝanĝis malĝojemoj. Tiam la vulpeto, pro ke eble li rimarkis sin al la plorvoĉo de sia patrino, forte sur la brakoj de s-ro TONBEJ movis kaj eksploris.

"Hej, ne ĝemu min tiel."

S-ro TONBEJ tiel kriegis kaj ekpiedis kun du kaj tri piedoj. (daŭrigota)

緑星の由來(2)

朝比賀昇

S-ro de Beaufront が緑色と星を考えたよりも以前に、一人のエスペランティストが、同志達がわかるような何らかの目じるしについて書いている。手元に Esperantisto 誌の1893.94.年号しかないが: Enciklopedio de ESPERANTO には、「1892年の ESPERANTISTO 誌181ページに Östersund の s-ro B.G.Jonson が エスペランティスト達は何か一定のしるしを採用すべきで、それにより 行き会った際に互を認めることが出来るだろう。 たとえばカラーの全表面につける色つき絹ぎれ がある」

1893年2月の n-ro 2(才38号)21ページは s-ro Jonson の提案に賛成と とを示している。すなわち、Vilno の友達は垂飾を提案している。s-ro Matusewicz は《Espero》という単語の組み合わせ文字を浮かした垂飾のデザインを送って来た。その考えによると、それは懐中時計のクサリか、鼻メガネの横につけられるようである。

1893年11月の n-ro 11(才47号)では、スウェーデン Boda の s-ro Arnald Thörn が書いている「もしすべてのエスペランティスト達が、文通の際にできるだけ多く、私達のしるし(緑色と金の星)や適当なエスペラントのスローガンをつけた封筒を使うことにすれば、すばらしく亦有用であろう。」

1894年10月の n-ro 10(才58号)は s-ino A.Prohorovic の手紙をのせている。「1892年の n-ro 12 と93年の n-ro 6 で s-ro B. Jonson や s-ro G.Rjabinin がエスペランティスト皆が同じしるしをつけるように提案しておられる。私はずっと前からこのことについて考えており、そのことは私達の事業を拡めるのに非常に良い方法だと思われる。 私は、すべてのエスペランティストが《Esperanto》と浮かした、青銅かアルミニュウムの金メッキ製の小さな Kvinpinta 星をつけるように提案する。 左胸にそれをつけたいと思う。が、この signeto は いつでも、亦どこでもつけられていることが必要である。つまり、家の中でも、教会でも、劇場でも、舞踏会にも、路上でも。 亦 冬も夏も、洋服にも毛皮の外套にも、学士院会員章がつけられているように。その星をつけたい方は、私あて(adreso: Grodono (Rusujo), strato Pesoĉnaja, domo de Ramli, al A.V. Prohoroviĉ)に希望部数と住所を報らせられたい。全エスペランティストの半がそうした星をつけるのを望んだ場合には私がそれを手に入れて、希望者に送ろう。 金メッキ青銅のその星(2.5センチ直径)は送料共1ルーブル、純金製は8ルーブルします。」

— daŭrigota —

学習者は斯うありたい

江口音吉

先般㊐に開かれたエスペラント講習会に引続き初等講習会が開かれている。今日迄エス語を学んだ人は多いが最后迄ついてゆく人の数はいたって少ない。これは寂しいことだ。エス語はやさしい、すぐ覚えられるといふ気持で習ひ始めるが進むに従って難しいものに突当り一度二度欠席し、ついにそのまゝになってすふのである。勿論先に歩んだ我々の指導の不充分の点もあるが、亦適当に興味をもってつゞけ得る中等講習用書などが戦後に於て特に少ない為めではあるまいか。この点については学会などに願って往年のエス語普及会の講習用書のように面白くついてゆける弾力性のあるものを編さんされんことを望みたい。先日久しぶりで出席された samideano が、もう今では小樽のエスペランテイストも多くなってゐて、公会堂に充満するかと思ってゐたと云はれたのは我々にとっては痛い言葉である。けれども、エス語を学べばすぐ金になるというものでもなし、又、外の語学の講習会もそんなものではないだろうか。併し semas kaj semas, sed ne laciĝas！である。道は遠い。そこに我々の努力する余地もあるのである。自分としてエス語を始めてから何をしたか、まだまだ大人になれないで困る。そこには片言会話の勉強であり、書いたものがない。本当に歩んだ足跡が書いたものとすれば自分は裏に近い。

さて今日は自分の考へてゐることを二三申述べたい。

エス語を学ぶについては毎日一頁以上を読む。単語がわからなくて辞書を必要とするところも前后の綴りより想像してあまわずによむ。もう一つは僅かな行でも丹念にくわしく辞書を引いて理解する。このニつをやってみたい。会話は Bonan Tagon 以外何でも喋べることに努力する。いい文章があったら暗誦してみる。時折のひとり言もいい。不平は必ずエス語で表現すれば周囲の人々にさわりがなくていいかも知れない。酔って Diablo！とどなり散らすのはどんなものか。ともかく耳を慣らすことであり、思ひついたら口より出してみることだ。尚、これが或程度進んだなら、会合などで挨拶などの短かいものをお互に通訳してみる。eraro をおそれず始めは大胆にやってみる。度重ねる内に korekta なものとなり、自信もついてゆくと思ふ。これは是非やりたい。

それから会費である。大部分は会長の負担で我々に課せられたのは最低の線である。又は毎月凡帳面に納めること、会計をして神経衰弱におち入らせぬ様でありたい。ためると家賃と同じくたいぎになる。エスペランチストの祭典ともいふべき年次大会、ザメンホフ祭、これにはこぞって参加する。先刻中途で止めた人も相誘って出席してほしい。大会、ザメンホフ祭は上達を比較する会ではないのだ。そして人々はエス語に対して新たなる情熱をもち得るであろう。中途でエス語を放棄すること彼我ともに惜しまれる。今一つの階段を登れば永久に世界の友であり得たものを。尚、来る9月の岡山の日本大会に参加するために M君 T君が plano を樹ててゐるという。両君の Juneco を羨む。

アメリカ航海の日記から……

高橋達治

2, ges-roj Scherer.

入港予定は再び遅延した。桑港での荷役作業が遅れ、そのためにロスアンゼルス入港は予定の午前七時を過ぎ、やがて、八時を過ぎてしまった。

私は焦った。S-ro Scherer の親切な手紙に感動した私は、シスコの f-ino Wolff を介して電話し又別に航空郵便で午前七時頃入港と知らせておいたからである。――深いガス。けれども中天はうす青く、大空はやがてそのまぶしい太陽の光と共に晝の姿をあらわそうとしていて、時々フォクスル（船首甲板）の鉄板がきらりと光って見えたりしている。――あと30分。入港用意を待ちあぐむように、セーラー達はもう甲板のあちこちに佇んでいる。――二番目のアメリカの港、ロスアンゼルス。喜びの期待が却って私の心を暗くする。不安だ。S-ro Chomette は岸壁に来ていてくれるであろうか。私は S-ro Scherer えの手紙にもロングビーチ第5岸壁とは知らせておかなかったのだが、果して、S-ro Chomette がそれを探知してその岸壁に来ていてくれるだろうか。私の焦慮と不安がやがて諦めに似た落着きに帰ったとき、ガスがはれ、海は広々と視界を拡げ、そして私の眼前、長い石積の防波堤の彼方、ロングビーチの数々の建物が、無数の林立する採油櫓の間に見えて来た。

11時、船はロングビーチA埠頭第5岸壁についた。もしやと思って岸壁にいる人々を探し緑星旗を持っている人、或いは緑星章をつけている人はいないかと、きょろきょろ埠頭を見廻してみたが、それらしい人の姿は見えなかった。〈S-ro Chomette は来て居られないのだ！〉〈しかし〉――私はすぐに S-ro Scherer の手紙を思い出した。〈電話をかけて自分でロスアンゼルスに出かけよう。〉けれども埠頭の電話函（公衆電話）の前に立ったとき私は再び考えなおしてしまった。〈月曜日だ、あの人達も忙しいだろう〉全くがむしゃらに私はひとりでロスアンゼルスにゆくことに決めてしまった。

サンペドロ駅にゆくよりロングビーチ駅にゆくのがよろしかろうというので、遂々道をききながら歩いていった。お晝時で自動車の中でパンなど食べている男に、最上級に丁寧な言葉で道を尋ねたら、たしかに詳しく道を教えてくれた。はっきり

とかない英語なのだが、ともかく、駅についたのだから、どうやら私も一応英語はわかって来たようだと自負する。 駅まで、船から40分も歩いたであろうか。かなりの道程で幾分疲れも感じた。しかしサンフランシスコと異って、ここは平坦な道路が広々と連なり、市街の彩色もシスコのような一様さがなく、すべてが強いコントラストをもった調子である。椰子の緑のみずみずしさや空の青さが、海から這い上って来た私には、異様にまぶしいばかりの快よさを与えた。赤い原色のシャツを着た子供がそこをはね廻り、黒色の衣をまとった老婆がそこのベンチに思案顔で腰かけている。 背中にびっしょり汗をかきながら（私は冬着を着ていた）ようようにして着いたロングビーチ駅とは全くがらんとした大きな切符販売所のことで、むしろ売店や案内所の方が大きな面積を占めていて、日本の普通の"駅"とは大分異っている。

"赤い電車"がくる。"For LosAngeles？" と念を押してから乗車。まもなく発車。市内では、日本の市電のようによく停車する。停車する度に車掌が、犬が吠えるような大声で駅名を車内に伝える。しかも一旦郊外に出ると電車はすばらしい速さで走った。

郊外にもなお無数の採油櫓が続いた。車窓から家のない"アメリカの土"をみることは嬉しいことであった。 或いはやがて二三の家々が沿線にあって、庭のブランコにたわむれる子供達などをみることも。 車内はきれいである。シートは日本の最近のロマンスカーと同じ作りで、切符はシートの前に差しこんでおけば車掌が勝手に検査し取りさっていってくれるから、絶対落して赤恥をさらす必要はない。しかし一時間餘の No Smoking には参った。

ロスアンゼルス駅についた。車掌にホリウッドはどうゆけばよいのか聞いたが、唯、ホリウッドはずっと西の方だとしか答えてくれなかった。だから駅を出ると私は予定通りハイヤーを雇んだ。

S-ro Scherer の手紙によれば"駅から家まで10分"と聞いていたので大した道程でもあるまいと思っていたのだが、とんでもないことであった。大体スピードの観念が全然違っているのである。自動車の広いハイウエーを、この自動車はすばらしい速さで走る。どんどん油をくってとうとうメーターインディケーターが2ドルをまわると金不足の私には随分心配なことであった。

もの静かな道路の中に入り、住宅地らしく芝生にかこまれた全く同じような型の家が沢山並んでいる。けれども白い扉の上に大きく黒くかかれた番地の数字から運転手はめざとく S-ro Scherer さんの家を捜して、その前に停車した。

日本の家とアメリカの家の比較をするのは幾分をこがましいことを思うが、私は日本の家の玄関について好感をもつものである。というのは、日本の玄関は居室とかなり離れていて、がらりと戸をあけるなり、さて、初対面の緊張をと身をひきしめて"ごめん下さい""いらっしゃいませ"まで相当余裕があるからである。 所がアメリカでは斯ういう設備の"効"が運用しない。例えば S-ro Scherer の扉の前に立った私がまだ戸外にいるからと自動車でふらふらに揺られた心身をそのまゝに、あたふたとベルをおせば、S-ino Scherer が扉をあけ How do you do と招じ入れたところはすぐに居室であるから私はすぐには言葉が返せなくなってしまうのである。それでも私がどうやらあわてて辞儀し、日本から来た高橋ですということのできたのは S-ino Scherer のエスペランチストに対する親しい、打ちとけた態度によるものである。 S-ino は英語でかなり早くしゃべられたのだが、ともかく S-ro Scherer は今出勤中であるが間もなく帰られる、ということ、それから Ges-roj Chomette が私を迎えにサン・ペドロに行かれたことを知った。Ges-roj Chomette がサン・ペドロに行かれたことを知ると私は全く愕然としてしまった。《こんなに信義にあつい人達であったの

だ》という喜びと《やっぱり電話をかけるべきであったのだ》という後悔が交々胸の中に湧いて来て、私は心の帰趨に迷った。船員であることの悲しさは限られた時間内の上陸を更に憂鬱にした。船を出たのが12時20分。ロングビーチに着いたのが午后一時頃。そしてs-ro Scherer の柱時計は今丁度時半を示している。果して ges-roj Chomette にも会えるだろうか。

間もなく s-ro Scherer が裏口から帰って来られた。往年の Ĉirkaŭmondinto は今は五十年輩の好紳士となられていたが、背の高い神経質そうな眉目の中に私は以前感じたことのない一種の敬意を感ずることが出来た。そうして私のこの突然の訪問は何か不快な感情をこの s-ro に与えたように思われた。挨拶すると、すぐ"何故電話をかけなかったのですか"といわれた。"ges-roj Chomette が君を迎えにサンペドロに行ったのですよ"私は二、三の言訳をしたが全く座していられないような気持であった。より悪いことには私がシスコで荷役人夫に投函を頼んだ手紙がまだ s-ro Scherer に届いていないというのである。ふと私の衷に人夫に対する不信が感ぜられ"何故まだ届かぬのでせう"というと"多分クリスマス前で混雑しているからでせう……"といわれる。丁度その時、配達夫が郵便をもって来た。一握りではつかめない程の沢山の手紙である。エスペラントのものだけでも一日平均七八通は受取るというから驚く。幸い私の手紙はその中にあって、私は言訳を書すことができた。

されども憂鬱であった。ges-roj Chomette が私を捜して居られる。とすればなるべく早く ges-roj に連絡してこちらに帰って頂きたい。s-ro Scherer があちこちに電話をかけて問い合されたが全くよりどころはない。親切な ges-roj に会はずにこのまゝ帰らねばならないのだろうか。

s-ro Scherer には子供が四人ある。女の子二人男の子一人、それに赤ちゃん。女の子の Antionette は s-ro の養子である。Antionette は愛嬌がいい。私の傍におずおずとやってくる。

子供に英語で挨拶する方法がわからずに閉口した(日本語でも知らないのだが)。Antionette が傍にやって来たとき s-ro は Antionette のハンケチを結んで見てくれというのだが、私がその意味を解しかねていると"日本人がやるように結んでくれ給え"という。丸結びに結んでしまったが、今日、s-ro から借りた"Ĉirkaŭmondo kun verda stelo"(s-ro の著作)をよんで此は失敗した、と思った。s-ro は日本滞在中日本の風俗に大変な興味をもたれている。私に Antionette のハンケチを結んで見よといわれたのは、日本の風呂敷を連想されたのであった。私は"アメリカ人も reef knot,(丸結)は使われるでせうに"といったのに s-ro は"あゝ此ですか"といって P.T.A 会長である s-ro 所有の knodo の模型(ボイ・スカウト用の)をもち出されて、がっかりされたような顔付をされたが、実は風呂敷を結んで一端をひくと簡単にとれる便利な結び方が見たかったわけである。このようにエスペランチストは世界中の風俗や習慣をよく知ることが大切である。Sperta esperantisto である s-ro はこの点手ぬかりなく私を導かれた。即ち、私に家中を案内していろいろ説明されるわけである。s-ro はいかに日本人の生活がアメリカの生活と異って居るかを非常によく知って居られるので特に生活の相違点に注意された。居間兼応接室、食堂兼子供の勉強室、台所、ges-roj の寝室(赤ちゃんが眠をさましていた)、子供の寝室(クレオンで描いた絵が壁に一ぱい)、浴室と便所(一つの室、シャワーもついている)、書斎、がある。台所の設備(冷蔵庫、ガス熱器、食器置場等は全部蓋をあけて中を説明される。家の周囲は芝生で、裏手には子供用の

ブランコ、滑り台がある。小さな庭園には雛菊が咲いていたが S-ro はそういう庭の片隅にある薪焼場さえ示して、何故アメリカの家の周囲がきれいに保たれているかを教えられた。此らのことはエスペランチストの特権に属する。突然外国の家を訪れて、その生活の様式を理解させて貰うことは他人のできるところではない。エスペランチストであるから、斯うして生活の様式についてさえ互に興味を持ち合え得るのだ。

幾程もなく時間は経過する。4時10分過、ges-roj Chomette に会えない憂鬱がのしかかるように私を悩ましたが、ともかく時間内に船に帰らねばならない。私が〝もう帰らねばならないが一応ハリウッドの街を一見したいものだ〟というと、S-ro は早速自動車を用意された。すべるように自動車がすべり出す。私達はまず moderna な食糧品店にいった。S-ino の命令(?)で斯うして S-ro は自動車でお使いにゆく。

U.S.A の食糧品店は日本の八百屋と雲泥の差がある。三越あたりの一階程の広さもあろうか、缶詰類が多く、野菜などでも目方ではかっていくらというような売り方をしない。針金の籠のついた車があって S-ro はそれをおしながら S-ino の注文ノートを首っ引きに、あちらこちらと探し廻られる。ようよう全部揃ったところでカウンターの所にゆくと、自動計算機で忽ち計算してしまうといった仕組である。買上品を袋に入れたボーイが〝毎度有難う〟といわぬでもおかしくない位機械的なものであった。

それから S-ro はハリウッド街に車を駆した。おびただしい人の群が右往左往するハリウッドの中心街はやがて来るべきクリスマスを迎えるための彩やかなデコレーションで飾られていた。車の前をそそくさと過ぎる婦人の姿もここでは別して美しいように感ぜられる。このブロードウエーをそれて椋樹の並木路に入ると、夕空に緑が水々しく、亜熱帯的な情緒をかもしていて美しかった。そこを通り抜けて、その緑の間に広々とした建物が見出されたとき、S-ro はここが撮影所であると説明された。突然 S-ro の日本訪問記で13才の山田五十鈴と一緒にうつられた若い S-ro の写真が思い浮べられたりした。

私は時間のないことに狼狽しはじめた。もう陽は西の山尾にかげり、sukiyaki とかかれた日本人店のネオンもかなりはっきりとしてきた。S-ro は車を早められ、広い自動車路を再びロスアンゼルスへ引返してくれた。

ロスアンゼルス駅に着く。私達はここで別れねばならない。——それにしても何というあわただしい別れ様であったことだろう。駅に着いたのが五時、私はいそがねばならない。Ĝis revido を叫び ges-roj Chomette や S-ino Scherer 他の同志に対して saluto の transdono を依頼することも気忙わしいばかりであった。

S-ro は〝青いバス〟に乗った方が早くゆけるといわれたので附近をさがしたがそれが見つからず、リンリンと発車ベルの鳴っている赤い電車にとび乗ってしまった。

私の心臓は早鐘のようにどきどきと鳴っているし、私の脳は狂わんばかりに焦躁している。ごうごうと郊外をゆく電車の窓から私は全く暗くなった夜空を見出すだけだ。——船に乗り遅れたら——恐ろしい私の眼前に迫ったことについての想像が私の胸をかきむしる。

隣に40がらみの至極愛想のよさそうな白人が坐っていて、時々話しかけてくれるのだが、私のこの心の状態では唯受け答えをするだけである。私はこの車をとび下りて船へ駆けて行きたいような衝動にさえ迫られているのだ。

けれども私はもはやこの電車に運命を託している以上、何をすることができよう。あきらめて、ポケットのニドルを使ってハイヤーで船にかけつけようと、あきらめともつかぬ善後策を考えて

いた。

電車はロングビーチ市街に入る。窓外がにわかに明るくなってクリスマスセールに賑はう夜の街路の華々しい有様が見えて来た。自動車店などは二三百米もつづいて自動車をならべて今が買い時と広告し、無数の電灯の光が遠い夜空をさえ明るくしているのは壮観であった。或通りではストリートデコレーションをさえ電気でやっている。私には私自身が夢の中にあるように思われたが、帰船という圧迫さえなかったら、全く、天国をさえ思わせたであろう。

ロングビーチ駅に着く。黄色のハイヤーを拾うために飛び下りる。と、突然私の目の前につかつかと、ベレー帽をかぶった五十年輩の小柄な紳士が現れた。"S-ro TAKAHASI !?" とその人は叫んだ。突嗟に"S-ro Chomette !?" と私も叫んだ。何という感激的な一瞬だったろう。何という嬉しさであっただろう。私は未だ曾ってこのような熱情的な握手をかわしたことはなかった。その瞬間私はこの不安な帰船時刻のことさえ忘れてしまった。そうしてS-ro Scherer に会って来たことや、楽しかるべき時間をそうして無意味に待たせてすまなかったことをのべて、喜び、且つは詫びた。

S-ro Chomette は11時頃家を出られて、先づサンペドロを探され、2時頃やっとロング・ビーチの私の船を見つけて、船に行かれたのだが、もう私は上陸してしまい、船で私を待ったり、それからこの街角でも随分長く待たれたのだという。そして、フランス人らしい熱情的な表現で、私に会えぬと思って心配されたことや、もっと早く連絡すればよかったのに、と残念がられた。

私達は初対面であったけれども、斯うして、外国人であるというわけへだても年令のへだたりも全く失われて、久しい知己に会ったかの如くであった。私はS-ro に会えた喜びや、S-ro の親切に対する感謝の念を申しのべながらも、やはり帰船をいそがねばならなかった。S-ro も船で出帆時刻を聞いているので心配されたが S-ino が自動車でくるからしばらく待てといわれる。

一台、自動車が私達の前に立ち止った。S-ino Chomette がその自動車からまをさしのべられた。S-ino も私には tro lerta である程の早口な esperanto を使われる。Chomette さん一家は家庭の日常語が esperanto であるのだから、私とは全く違う。S-ro が指図され、S-ino が運転される。自動車は例の岸壁を滑りこんだ。いそいで下りて三人駆足で船の着いているところにゆく。

倉庫の屋根の上に日本郵船（私の船の会社）がぽっかり見えたとき、私はいいようのない安心感と満足を感じた。舷門に立っている操舵手に"出帆は？"と聞くと、積荷の都合で二時間延期したという。天の助けであった。

私はやっとおだやかな気持で ges-roj と語り、且又 ges-roj に感謝の意をのべることができた。乱雑で小さな私の部屋へ夫妻をお招きして、しかし楽しく日本とアメリカのエスペラントのことを交々語り合うことができた。ロスアンゼルスは人口約200万人で200人のエスペランチストがいるという。私は人口17万の小樽に約50人のエスペランチストがいるといったら、人口に比して tre multaj だといわれたが、小樽の50人は名簿の上に名前を連ねているだけの人もいるのだから比率からいってもロスにはとても及ばないと内心 hontenco を感じた。

それから私は船内を案内した。船橋のことを ponto（英語 Bridge）というか、などと termino を議論したり、ボーイに無理に客室をあけさせて内を見せ、Ĉu vi ne bonvolas

veni al Japanio per tiu ŝipo と聞うて、s-ro がにこにことうなづかれるのを見た。普通船員室でセーラーの草履をめざとく指さされたり、食堂の飯びつを riz-timo だといわれたりして s-ro Chomette は仲々 bonhumora である。

時間が過ぎた。私達は再会を期して別れた。帰り途にはきっとよく連絡して私の家に来るようにと s-ro が念を押される。

ĝis revido をお互いにいいながら、やがて自動車が動きはじめると、s-ro Chomette が最后に "VIVU ESPERANTO!" と叫ばれた。暗い岸壁の友の彼方にいつまでもいつまでも s-ro がその自動車の後に特別につけられた緑の星が明らかに見えているような気持がした。

昨日のことはあまりにも鮮明に、私の脳裏にきざみこまれている。しかしそれはこの船室に呆然と腰かけている私には現実のことであったようには思えない。けれども、たしかに s-ro Scherer から借りた "Ĉirkaŭ mondo kun verda stelo" が、s-ro Chomette から私に donaci されたこのラッキーストライクの煙が、私にはっきりと教えてくれる。"それは確かにお前の昨日の現実だ。" ges-roj Scherer, ges-roj Chomette! たしかに私の胸の中にはあの人達からうけた心の温もりが、まだはっきりと感ぜられる!

(1952年12月17日記)

La Fratinoj malbenitaj de akvobirdoj

Sapporo, ARIMA Yosiharu

Estis granda viandbutiko, kiu estas tre prospera ĉiutage, en strato Takara, urbo Turuoka, distrikto Nisitagawa, gubernio Yamagata.

La estro de la butiko havis du filinojn, kaj unu el ili estis naskita en la jaro 1894-a, alia estis naskita en la 1896. Ili estis la plej belaj knabinoj, kiujn oni povis trovi. Sed iliaj manoj kaj piedoj havis naĝmembranojn inter fingre.

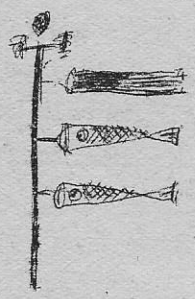
La membrano kreskadis forte iom post iom, laŭ kreskado de la fratinoj. Gepatroj de la filinoj tre ĉagreniĝis pro tio kaj ili sekrete detranĉis la membranojn en kirurgia hospitalo, sed mirinde ree kreskis post nelonge. De tiam la patro provis kelkfoje detranĉi ilin, sed ĝi estis tute vane.

Vidi la fratinojn, kiuj ĉiam bandaĝas la manojn per neĝe

blanka bandaĝo, estis tre kompatinde. Oni diris, ke la malfeliĉo de la fratinoj estus eble kaŭzita de malbeno de la akvobirdoj, kiuj estas mortigita kaj vendita de la estro.

Ili ankoraŭ nun postvivus, ĉar ili estis tre sanaj en la korpoj krom la kvarmembroj.

(La rakonto parolita de iu maljunulo, kiu konas efektive la malfeliĉajn fratinojn.)



La Historio de Japana Kuko

Noboru HAYAKAWA

En la paso de mia studado pri japana folklore, mi ofte interesiĝis en ĉi tie elmetitatemo. Sed tamen, pro mia okupiteco mi ankoraŭ ne havas bonegajn materialojn, per kiuj la problemon oni plene klarigos. Sekve, mi nun nur, pri la temo, kanigu la resumon de la kompreno de mia frua instruisto, S-ro Kunio Yanagida, en lia verko.「生活のさまざま」(昭和24年)

Li skribis kiel jene:

La vorto "Kaŝi" per kiu ni japanoj indikas la sekan sukeraĵon kaj la vaporumitan aŭ nebakitan kukon, origine signifis la frukton. Estis nur sekiĝe rezervebla por krude aŭ rafine manĝi, ĉar la dolĉaj kaj molaj el fruktoj, ekzemple kaŝteno, persiko, piro, rubuso, aŭ la frukto de ŝio, ne estas manĝeblaj krom kelke da tagoj. Prenante ion el ili per fingroj, iu nur manĝis por konsoli sin kiam vizitita, ne por toleri sian malsaton. Nur en la benita januaro, ĉiuj familianoj en japan kamparo kunsidante manĝis "kaŝi"-ojn, ekzemple sekigitajn persimonojn, — kaŝitanojn ("Kaĉi-guri"), aŭ la fruktojn de la Torreya nucifera, certe amasigitan kun ronda maso da moĉio ("Kagami-moĉi") sur "sanbō"-o. Post nelonge, la laminario, tiu science nomata "Dioscorea japonica" kaj alia estis ankaŭ aldonita al la "kaŝi". Tamen, la pli ĝojebla estis la bakita sojfabo flanka aŭ nigra, kaj due la fabo. Antaŭ 60 jaroj, jam estis novaj kukoj ankaŭ nomitaj "kaŝi", krom tiuj, sed nur en urboj. La geknaboj en vilaĝoj fakte manĝis tiujn.

En Kyōto kaj aliaj grandaj urboj, aperis la kukejo en malnova tempo. Sed tamen, tie estis nur venditaj la frukto de iaj arboj, la legumeno, la laminario, kaj tiel nomata Dioscorea japonica, kiuj ĉiuj estis bone gustigataj manĝeble. En la moderna tempo, estis importata de Ĉinujo la sukero, kaj sekve iuj en la "Kinki" Distrikto, uzante ĝin, elpensis la sekan sukeraĵon ("Hi-gaŝi") kaj vendis ĝin regione. En nia lando, la origino kaj evolucio de la tro mola kuko por dismordi estis sufiĉe nova. Ĝi estis nomata "O-ĉa-no-ko," kaj ankoraŭ nun. La nomo signifas la kukon en temanĝo. En nia kamparo, ĝi estas somere pastkuko kuirita per la fagopira faruno aŭ la pluvoroj de la Echinochloa Crus-galli edulis. Ĝi iam estas helpa manĝaĵo de kamparanoj.

児童画 写真 絵ハガキ 郵便切手

花園凡太郎

私は実におびただしい降客の中に混って、新京中の札幌駅の待合室に出ると、地下の「ステーションストアー」えと階段を降りて往った。入口の壁に掲げられた児童画が目に入ったので立ちどまって眺めた。右手の小さい一室に児童画の展覧会が開かれていると解った。私は小学一二年生のクレパス画から五六年や中学二三年生の水彩画をひとわたり丹念に眺め歩いた。市長賞や何々賞の金銀の紙の貼られた絵の前にも立ちどまって眺めた。

それから私は、化粧品やお菓子の売場の前を通って、雑沓する人の中を泳いで、きわめて小さい喫茶店に入った。注文した熱いコーヒーが来ると、それをゆっくりすすりながら、いま観て来たばかりの児童画について考えてみた。

――みんな達者によく描けている、と私は感心した。大人が顔負けするほどうまく描けているのもあった。しかし、と私は思った。これら受賞した児童画はみな同じようなタッチで同じような色調である。そこには児童の個性がどこかに飛んでしまっている。そこにあるものはみんな大人の模倣のみだ。私は頭の中で、いつか小樽 Esp-Asocieto 主催の Esperanto-Ekspozicio で観た北欧の児童画と、いま観た日本の児童画とを比べてみた。北欧の児童画は、いっぱんに絵としては下手であるが、そこには、かれらの個性が生きている。一本の線にも、一つの色彩にも、ヘタな模写らしいものにすら、その児童の個性が生きている。そこには、単なる模倣が存在しない。

私は、これらの児童が成長した暁(アカツキ)に、どんな絵を描くであろう？と想像してみた。

単なる模倣からは、芸術はけっして生み出されはしない。読者は Vincent van Gog の「種蒔く人」の絵の複製を見られたであろう。あの絵には Gog の魂が生きているのを看取れるではないか。

私が言いたいのは、個性を生かす習慣を幼い時から身につけよ、ということである。

このことは、単に児童画だけの問題ではなく、あらゆる問題に適用することだと思うが、絵画に関連して考えられることは、日本人の写真のことだ。

『国際写真年鑑』に、近頃は日本人の写真が毎年2.3人位入選しているのは喜ぶべきことだが、ここでも日本人の作品は、一体に個性が弱いように感じられるのは遺憾である。

写真をとおして観ても、アメリカ人はアメリカ人の眼で、イギリス人はイギリス人の眼で、ドイツ人はドイツ人の眼で撮影していることがハッキリうかがわれる。

戦前、外国を旅行して、眼鏡を掛けて写真機を吊してる男に会ったら、それはまぎれもなく日本人である、と言う話が群出するほど日本人には素人写真家が多いようだ。戦后は素人写真家が益々ふえる一方であるが、さて技術の進歩という点に至るとどんなものかな。凡太郎のような写真技術を何も知らぬ人間にも余り頂けないような写真が多いようである。日本人の写真はヘンにせい sentimentala なものが多いようだ。風景には文学青年的な題名をつけて独り悦に入っている手合が案外多い。こうした sentimentala な感じ方は、日本人個有の伝統から来ているものであろう。

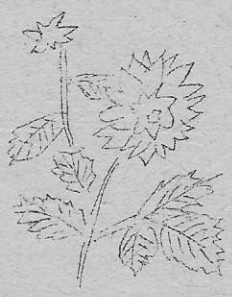
だから、絵はがきをとってみても、御多分に漏れず、何処の絵ハガキも似たり寄ったりの構図と来ているからやり切れない。観光協会がいくらガンばってみたところで、自動車道路もホテルも綺麗なものが続くでは、せっかく日本を観にやって来た観光外人客は一ぺんでコリコリしてしまうだろう。よしんば、かれらを驚嘆させるようなすぐれた景観があっても、途中の悪路で自動車が滅茶苦茶に揺れたんでは二度と訪ねる気はしないだろう。

序だからもう一つ郵便切手を挙げよう。

わが国では最近一年間に2.30種以上にのぼる夥しい PM を出しているが、印刷技術から色彩調子ともに幼稚きわまるものばかりで、諸外国の PM と比較するならば数段雲泥の差があることは素人の目にも判るだろう。ここにも無駄と無為の象徴とマンネリズムが見取られる。郵便切手のかずかずの誕生生き生きと表現されているか。国立公園のグラビア切手のどれがほんとうに風景の美しさを表現しているだろう？

わが国には国際文通者の数が相当に多いと思われるが、それらの人々から一向に「切手」に対する不平不満の声が起った話を聞いたためしが無い。国際文通者は外国文でハガキや手紙を海外の友人に書いているだけが能ではあるまいと思う。こうした面にも頭を配る必要が大いにあるのではないか。諸君のところに送られて来る海外からの絵ハガキや切手を眺めて、日本の絵ハガキや切手と対照する時、冷や汗をかかずにおれる人が果してあるだろうか。

今日配達された『切手』(Postage Stamps)〔オ1巻8号〕を見ると、皇太子殿下御外遊記念切手御肖像入り切手は創意意と決定！とあった。これが民主主義国日本の宮内庁の意嚮によるものとは怒れ入るの外はない。独立後一年で日本には、またもや天皇や皇太子を生き神様扱いにする空気が相当に強くなって来たようだ。英国女王エリザベス二世陛下の戴冠式記念切手が御肖像入りで本国はじめ英国連邦諸国からドシドシ発行されているのに……これは一体何とした anakronismo だろう!!



UNUA PAŜO EN AMO

H. KODAMA

Vepere de februaro, viro kaj virino promenadas krucante manon kaj mano. La viro estas 23~4 jaraĝa kaj virino estas 18~9 jaraĝa. Ŝi portas la mezurilon kaj paketon en sia maldekstra mano.

VIRINO — Ĉu vi por ĉiam amas min kiel nun?

VIRO — Jes! prefere mi estimas vin.

VIRINO — (kun maltrankvileco) Sed, ĉu vi amus aliulinon forlasinte min?

VIRO — Mi amas homon, sed tiu amo diferencas je vi.

VIRINO — (kun maltrankvileco) Kion signifas tio?

VIRO — Mi pensas ke mi devas ami ĉiun homon, do, mi tiel parolas al vi.

VIRINO — (kun simpla vorto) Ĉu, se mi mistifikus vin,?

VIRO — Kion vi diras?

VIRINO — (pli simple) Se mi vin mistifikus kun la aliulo.

VIRO — (kiel eble plej simple) Se estus tiel, mi protestos lin, kian amon li havas por vi. vi, absolute ne povas mistifiki min.

VIRINO — (serioze) Mi, mi sentas mian propran honestecon (briligante la okulojn pro amo) tute ne, mi neniam amas ĉiujn ajn virojn krom vi.

.....

VIRO — Pro tiel malfrua nokto, kiel vi protekstos al viaj hejmanoj?

VIRINO — Taŭge mi protekstos.

VIRO — Kion signifas tio?

VIRINO — Se iu homo vidus min apud la domo de la instruistino de kudr lernejo, mi diros al miaj hejmanoj ke, mi estis en ŝia domo. Sed, se, iu vidus min apud la parko, mi diros ke mi piediris preter la parko survoje al mia amikino.

VIRO — Tamen, kion vi diris al viaj familianoj, kiam vi eliris ekde via domo?

VIRINO — Mia patrino tiam ne estis en la domo, tial mi diris al mia pli aĝa fratino, ke mi iros al la instruistino de kudrejo. Sed mia fratino scias ke mi kunportis la libron, kiun mi pruntepreniis de mia amikino. Tial, certe la fratino dirus al miaj gepatroj. "Hinjo iris al la instruistino de kudrlernejo, tamen alie ŝi irus al ŝia amikino,, do, se iu homo vidus min apud la parko, mi diros ke mi iris al mia amikino preter la parko. Ĉu vi komprenas min?

VIRO — (murmurante) Jes ---- um ---- um ----

VIRINO — Vi, kion vi konsideras?

VIRO — Tio estas via troa saĝaca, kiel vi estas lerta por artifiko!

VIRINO — Sed tio estas nur al parko (kun fiereco) mi neniam mensogas al mia patrino.

VIRO — Mi maltrankviliĝas pri vi, ke tiamaniere vi faros lertan artifikon al mi, kiam mi fariĝos mia edzino, ĉar mi estas honesta.

VIRINO — Vere, tio estas nur al la parko, mi neniam mensogas vin.

VIRO — Mi komprenas vin, jen vi tiel estus, ĉu vi promesas al mi ke de nun vi absolute ne mensogas?

VIRINO — Jes!

VIRO — Pri hodiaŭvespera afero vi diru al viaj gepatroj la veron, malgraŭ tio, eĉ se via patro riproĉos vin, vi akceptu tion, ĉar tio estas pro mi kaj vi. ĉu jes?

VIRINO — (feksante la okulojn atentemajn sur la viro) Jes! vi estas honesta vere!

.....

(en ŝia domo la familianoj altabliĝas krom ŝi)

PATRO — (kun tondrvoĉo) Kion vi faris ĝis nun? Kiel vi revenis tiel malfrue?

PATRINO — Kien vi iris?

FILINO — (post granda spirita konflikto) Al la kudrlernejo ----

PATRO — (kun granda malamo) Ĉu tio daŭris ĝis nun?

FILINO — Ne ---- tamen de tie mi iris al mia amikino por redoni la libron ------ plie pro alia afero. (pli kaj pli ŝi havis menfidon kaj ŝi sukcesis por mensogi)

.....

(morgaŭ)

VIRO — Kion vi diris reveninte de via domo hieraŭ?

Ĉu vi faris mensogon ?

VIRINO — (Kun granda konfuziĝo) Ne, mi diris la promenon. (Sen ŝi teren malleviĝis la okulojn pro tio, ke ŝi mistifikis krom la patro kaj la patrino, plie amatulon, tamen ŝi baldaŭ trankviliĝis konvinkiĝante ke tio estas neevitebla)

VIRO — Ĉu vi ricevis la riproĉon ?

VIRINO — Ne !

VIRO — (Nu, ĉu jam li fariĝis blindeca proamo) Ho! hura ! Jen vi konvinkiĝas ke vi povas fari ĉion sen-mensoge, ĉu jes ?

VIRINO — (Nu, ĉu jam ŝi fidas viron, aŭ ĉu ŝi menfidas obeemon al li) Jes, kompreneble, mi ne volas mensogi al vi vere !

(- Fino -)

PARDONON

KAJAMA-JASUKO

Kiam li aperis en mia domo ? — Mi ne memoras.
Kiel longe li restis en mia hejmo ? — Mi ne memoras.
Mi nur memoras, ke en tiuj tagaj mi ankoraŭ estis knabineto.
Mi nur memoras, ke mi ofte promenis kun li sub la brilanta suno kaj inter verdaj arboj, sed mi ne povas rememori neĝon kun li. Do, mi supozas, ke eble li restadus dum domero de iu jaro en mia domo, kaj tio estus antaŭ ĉirkaŭ 20 jaroj.
Iun tagon, neatendite, unu sinjoro aperis antaŭ mi, kaj mia patrino prezentis lin al mi.
"Tiu ĉi sinjoro estas unu el malproksima parenco de patro. Li restos ne longe kun ni. Vi ne petolu, nek ĝenu lin. Vi devas konduti al li afable kaj ĝentile."
Mi kapjesis senvorte kaj levis miajn okulojn al li.
Li estis tre altiveska kaj dika, sed la okuloj estis plenaj de milda brilo, kaj la buŝo aperigis gajan rideton.
Miaj okuloj renkontis kun liaj okuloj, kaj ni ridis samtempe.
De la tago, ni amikiĝis unu la alian.
Supozeble li estus ĉirkaŭ 30 jara — mi opinias.
Tre ofte, ni promenis al marbordo, monteto kaj strato.

Mi ofte sentis laciĝon, ĉar mi ankoraŭ estis tro malgranda infano, kaj bonkoreca sinjoro devis helpi mian paŝadon de tempo al tempo per liaj fortaj brakoj.

Nun mi rememoras unu scenon.

La tago estis varmega, la suno estis ĵetanta fortajn radiojn sur ĉiujn.

Eble li estis vizitanta sian amikon de ĉirkaŭ-urbo, kaj mi estis kun li kiel kutime.

Sub varmega sunradio, de tempo al tempo, li viŝis ŝviton sur frunto per naztuko, sed mi paŝis alparolante al li tre ofte, aŭ pendigante mian korpon al lia brako.

Mi pensas ke certe li estis tre ĝenata, sed li neniam riproĉis aŭ koleriĝis min.

Lia parolo ĉiam ĝojigis min, kaj precipe mi sentis intereson al lia voĉa intonacio kaj karakteriza tono.

Precipe mi sentis tion en lia voĉlegado, kaj mi ofte petegis legadon al li.

Ankoraŭ foje, mi devas rememorigi alian scenon.

Iun tagon, mi ekiris en bibliotekon.

En tiuj tagoj, mi povis kompreni nur ioman literon. Sed pro intereso mi iris tien kun mia frato malofte.

La tago estis pluvema. Li eniris en geknaban ĉambron por mi. Paŝante en la ĉambro, mi sentis karakterizeman odoron de elementaj gelernantoj. La odoro ne estas malbona, ne nur al mi estas iomete karmemora; sed tiu tempo mi sentis malgrandan malŝatecon al la odoro en malseka aero.

En mallumeta ĉambro estis legantaj kelkaj geknaboj.

Mi rigardis infanan libron apud li, kaj li estis leganta ium libron, sed baldaŭ mi enuis, kaj tamen, mi ekpensis unu petolaĵon.

"Sinjoro, bonvole legu por mi!" mi petis al li kaj montris la libron.

"Bone, nu!" li ricevis la librom de mi, afable kaj tuj eklegis kun laŭta voĉo.

Ho! kiel aminda sinjoro li estis!

Nun, mi povas senti tutkore lian bonkorecon.

Ĉirkaŭaj geknaboj vidis min kun stranga maniero, kaj mi estis detenanta ekridon.

Unu komisiito venis al li, kiam eble li legadis ĉirkaŭ dum 10 minutoj, kaj flustris ion al li.

En la momento, li [illegible] kaj diris min.
"Nun, mi estas riproĉata de li, ĉar oni ne permesas legadi tie ĉi kun laŭta voĉo."
Ankaŭ mi ruĝiĝis kaj hontegis min mem.
Ni revenis korpremante hejmen.
En pratempa memoro, mi ofte rememoras lian embarasitan vizaĝesprimon, kaj samtempe memriproĉo atakas min. Li baldaŭ foriris de ni, kaj mi neniam vidis lin, malgraŭ, ke mi preparas la vorton, nome "PARDONON"

— La fino —

発刊一年目 :..... S.Y.

LEONTODO もこれで6号を数えた。丁度一年前の6月の今頃、講習会の最中だった図書館に出かけていって講師の D-ro 山賀、や S-ro 高橋、F-ino 佳山などに、機関誌を作りたいから、と協力を懇望した。もちろん直ちに賛成されて、萬事は私（山本）にまかせられることになったが、当時は、もちろん私のやろうとすることなど誰も何とも思わなかった。その頃、絶えたくなっていた協会の機関誌 VERDA HAVENO OTARU ぐらいのが出来ればたいしたものだ、とみな思ったらしい。実際、当の私自身、とうとうぱんで何か刷ったことなど殆んどなかったので、印刷に自信があった訳でもなく、その上、この種の雑誌の編輯の経験も皆無であったから、今日の LEONTODO の繁昌は予想だにし得なかった。

当初から私が願望していた様に、今や LEONTODO も、小樽エスペラント協会（OTARU ESPERANTO-ASOCIETO）の単なる機関誌・文藝誌から脱皮して、全道のエスペランティストの同情と支援をうけるに到って、事実上北海道エスペラントの機関誌の地位を占様しつゝある。来たるべき9月（予定）の北海道エスペランティスト大会（Hokkaido Esperantista Kongreso—於、小樽）に、LEONTODO を H.E.L（Hokkaido Esperanto Ligo）の正式の機関誌として確認する様提議しよう、という意見もぽつぽつある。もとより私にも、それは望ましいことに思われる。しかし、私自身それを提議する立場にはない。LEONTODO にその様な権威を与えることについては、読者の意見を徴するよりない。又、それがいちばん正当で正常である、といえる。ただ、非公式な私の意見をのべさせてもらうなら、

1. 敢えて LEONTODO でなくとも、何等かの形で H.E.L の機関誌の定期（不定期）発行は必要である。

2. 同志全部が連帯責任でこれの充実と発展に積極的にならなくては不可（特に、消極分子に引きずられることに戒心を要する）。

3. 経費について編輯者に苦労をかけないこと（REVUO ORIENTA をみよ）。

4. H.E.L 会員が自由にどしどし投稿し、批評する気運をつくり、且つそれを持続させる。

少なくとも以上の諸点に誠意ある考慮が望まれる。編輯も専制と独善を排し、マンネリズムにおちいらぬ様絶えざる勉強が大切である。

本州諸支部の organo（機関誌）は内容的にいいものもあるが、これらの模倣に汲々とすることなく、特色と、不断の斬新さと、弾力のある内容（世界状勢の緊張を反映する）でありたい。

Dankon! pro via bonkoreca helpmono al ni.

S-ro	江口	100	jenoj
S-ro	高橋	100	〃
S-ro	下山	100	〃

◇人物往来----

D-ro 山賀4月上旬 上京
学会訪問

S-ro 早川 学会定例協議会
(第1回, 4月26日 於東京学会)
に出席

S-ro 高橋 京阪神地区エスペラント大会
に参加 (5月15,16,17日)

Aprilo ~ Majo
札幌、小樽エスペラント会活動
状況

◇小樽… ㊗デパート四階にて4月
28日, 29日, 30日 Ekspozicio
(展覧会) 開催
29日 (天皇誕生日) 札幌より S-ro アリマ
S-ro 児玉 来場. 展覧会の盛況に満
足する。それから帰札までの数時間を S-
ro 山本宅にて S-roj 高橋. 土田.
山本を交えての懇談.

5月6日 市立図書館にて講習会開講
講師 S-ro 高橋. 毎週水曜日 p.t.m.
5a~7a だが. 常時10人前後出席

◇札幌…… 新築札幌駅地階にて展覧
会開催中.
講習会は 北大数学教室内
毎週土曜日 p.t.m 1a から

LEONTODO N-ro 6

1953年5月26日 発行 (隔月刊)

発行人 小樽市花園町東3丁目11番地
山賀眼科医院内
小樽エスペラント協會

編輯・印刷者 小樽市住ノ江町9丁目8番地
山本昭二郎

会費 15円 (外に郵税8円) 切手代用可

正誤表

21p 下から12段目
倉庫の屋根の上に日本郵船の「アンネルマーク」がぽっかりと…… とする.

30p 最上段.
En la momento, li rugiĝis pro honteco kaj diris min
とする…